

書 評 と 紹 介

木下賢一著

『第二帝政とパリ民衆の世界』

——「進歩」と「伝統」のはざまで』

評者：佐伯 哲朗

1

本書は山川出版社から刊行されつつある「歴史のフロンティア」シリーズ（全37冊）のうちの1冊である。出版社の宣伝パンフレットを読むと、このシリーズは一人の著者がそれぞれの本を書き下ろすことになっているようであるが、本書は著者の既に発表された論文をもとにして書き改めたものである。

本書の「あとがき」によれば、著者はもともとヨーロッパ近代とは何かを問題とし、ヨーロッパ内在的な近代批判が必要であるとの考えから、民衆運動に関心をもった。民衆運動研究の方法に関しては、柴田三千雄氏と喜安朗氏の方法をふまえて新たな方法を探ることが著者の課題であった。

著者によれば、柴田氏のジャコバン主義とサン・キュロット主義の構図は19世紀後半には適用できなくなるが、喜安氏のサンディカリズム研究における「行動的少数派」の概念ではパリ民衆のサン・キュロット主義的側面をとらえることができない。それゆえ、パリ民衆を意識的に労働者エリートと大衆に区別することによって、19世紀「パリの民衆の世界に内在する構造」（291頁）を明らかにしようとする。著者は、初

期には民衆運動を内在的に明らかにしようとしたが、最近では近代国家と民衆との関係に関心を移し、「そこから労働者エリートの問題がでてきた」（299頁）のである。

さらに著者は、労働者エリートの言説と行動を通して、産業化と都市化に直面した労働者のおかれた状況とそれにたいする労働者の意識をより明確に把握できるとする。また、19世紀のパリの革命的民衆と、産業化と都市化に直面したパリ民衆との関係を明らかにしようとする。

2

まず、本書の構成を紹介しておこう。本書の構成は、次のようになっている。

序章 産業化と労働者エリート

第1章 ロンドン万国博覧会とトラン—労働者エリートの登場

第2章 労働信用組合とブリューズ—ブルジョワと労働者エリート

第3章 パリ万国博覧会とタルタレ—産業化と労働者エリート

第4章 パリ民衆の世界—帝都パリと民衆の日常世界

第5章 公開集会とブリオヌ—「革命的」民衆と労働者エリート

第6章 インターナショナルとヴァルラン—社会の「再生」を求めて

終章 「進歩」と「伝統」のはざまで

あとがき

付録 索引／文献案内／本文引用史料・文献一覧／図表出典一覧

本書の内容をまとめると次のようになる。

トラン、ブリューズ、タルタレ、ブリオヌ、ヴァルランという5人の個性的なパリの労働者

エリートを中心にして構成する。この5人はおのおのが、その時々の政治・社会状況を凝縮して表現している人物である。5人を通して第二帝政という時代の一面を明らかにしようとするが、これまでの労働運動史や社会主義運動史のような、ある一定の方向に向かっての発展の歴史をめざしていない。

1860年前後から、普通選挙をめぐる、帝政と共和派がともに労働者に接近をはかるようになった。こういう状況を積極的に利用して、トランに代表される労働者エリートが政治舞台に登場した。彼らは、1848年の挫折と第二帝政期の産業化の進展を前にして、48年のようなユートピアではなく、現実的な改革を実現しようとした。彼らは帝政と共和派にたいして労働者の自立を主張した。ここに帝政と共和派と労働者エリートの新しい関係が作りだされたが、これは新しい政治構造の萌芽的出現を意味した。

1862年のロンドン万国博覧会への労働者代表選出は、この時点でのパリの労働者エリートの登場を意味していた。しかし、彼らは既存の相互扶助組合を基盤にした人びとであり、そういう意味では既存のエリート労働者が一時的に政治舞台に登場したにすぎなかった。トランを中心とする一部の労働者は、万博を契機としてパリの労働者エリートの核を形成していき、やがてインターナショナルのパリ支部を結成した。これはパリの労働者エリートの知的部分を結集した研究団体であった。

他方、同じく48年挫折と帝政期の産業化を前にして、カベ主義からの思想的転回を遂げたブリューズによって、1860年代に新しい潮流が生み出された。それは、ブルジョワの協力によって設立された労働信用組合が推進した協同組合運動であり、48年のユートピア的協同運動とは根本的に異なっていた。トランが労働者の自立と連帯を高らかに宣言したとするなら、これは

現実のなかでそれを実現しようとした試みであった。そこは多様な社会階層の人びとと労働者エリートの持続的接触の場になるとともに、パリの労働者エリートのあいだに人的つながりをつくりだしていった。インターナショナル・パリ支部が設立されたときには、彼らの多くが加入している。こうして、パリの「労働者エリートの世界」が少しずつ形成されていった。

タルタレを中心とする協同組合主義者の一部は、1867年のパリ万博の労働者代表の選出を利用して、労働者代表たちの総会の定期的開催を実現した。この総会は、2年間にわたってほぼ毎週開催されたが、そこでの持続的な議論と接触を通じて、パリの労働者全体を代表する「労働者エリートの世界」が形成された。パリの「労働者エリートの世界」の影響力はピークに達し、政府とも共和派とも対等に議論し交渉することを通して労働者に多くの成果をもたらした。しかし、彼らには大衆に依拠するという考えは希薄であった。

他方、1868年はじめにインターナショナルが裁判によって解散させられ、労働者代表総会は同年6月の公開集会の開催とともに影響力を失い、労働信用組合は同年末に倒産した。このように、1868年には1860年代初頭に登場した労働者エリートによって形成されてきた世界が消滅してしまった。

それに代わって、公開集会を通じて新しいタイプの労働者エリートが登場する。彼らはそれまでの労働者エリートのように、合理的な議論と交渉による合意形成を求めるのではなく、ブリューズに代表されるように神秘主義的でメシア主義的であり、聴衆の心の深部を揺り動かすようなアジテーターであった。彼らは、その演説を通して、民衆の日常世界のなかに構造化されていた革命的な伝統を解き放つことによって、19世紀の政治的・社会的危機にさいしてつねに

登場するパリの革命的民衆を出現させたのであった。

1868年に「労働者エリートの世界」が舞台から姿を消したあと、ヴァルランを中心とするインターナショナルの集産主義者たちは、インターナショナルをそれまでの研究・宣伝団体から運動団体に転換し、積極的にストライキを支援し、労働者の組織化を進めていった。さらに、公開集会でも宣伝活動を展開することによってインターナショナルの影響力を拡大していった。ヴァルランは労働者の日常生活に基礎をおいた社会変革論を提起し、本来抵抗の組織である労働組合を、労働者の意識変革と未来社会を準備するものとして位置づけた。1860年代の労働者エリートの理念であった労働者の自立と連帯は、大衆的な基盤のうえに実現することがめざされたのであった。彼はまた公開集会に登場してきた革命的パリ民衆をも視野に入れていた。

3

次に評者が感じたことを書いておきたい。ただし、本書のような手堅い本の内容についての内在的なコメントは評者の学識では困難であり、書き方が外在的な書き方にとどまる点については著者と読者に御了解をいただきたい。

本書の特徴は、全体の叙述の基礎にある、延べ4700人強のパリの「労働者エリート」とその周辺の労働者についての数量的な分析である。その大半はメトロンの『フランス労働運動人名事典』に記載されていない人物である。著者はそのような数量的分析を基礎にして、コミューン議員106名のうち公開集会の弁士が少なくとも42名はいたことを明らかにする(212頁)。そのような著者の作業は、門外漢の勝手な想像を許さないものである。

まず、評者が感じたのは、「パリ民衆の世界」という本の表題から予想されるイメージと本書

の内容とがやや異なっていることである。少なくとも評者にはそのように思われる。内容からすれば、本書のキーワードは「労働者エリート」のはずである。「労働者エリート」も「民衆」のなかに入る、あるいは「労働者エリート」こそが「民衆」を代表する、と著者は考えていると評者には思われる。ただ、評者としては、「民衆」と「エリート」が同じものとしてくられるのには違和感を持たざるをえない。

なお、著者が使う「労働者エリート」という概念については、評者には必ずしも明確な概念ではないように思われる。著者は、「労働者エリート」について「知的能力と行動力」を持っており、「個人的な利害・願望を超えた事象に強い関心をもっている」とする。それはどのくらいの広がりをもっていたのか、また、5人の労働者エリートを取り上げているが、この5人を選択した基準は何か、という点についての説明はかならずしも充分ではないように思われる。

最後に、評者が関心を持った点について書き添えておきたい。著者は終章で、第3共和政とパリ・コミューンにいたる2つの流れの分岐を示している。「トランやタルタレは第三共和政への流れにのり、ブリオヌはコミューンへの流れにのっていった。ブリューズはどちらの流れからも身を引いていたようにみえる。」と著者は書いている。だが、パリ・コミューンに加わったブリオヌとヴァルランについてはわれわれは一応の結末を知っているが、トランとタルタレについてのその後の人生については読者には情報は提供されない。「流れにのり」というのは、どのような意味なのであろうか。第3共和政の時期に広い意味での労働者の活動に関連して何らかの役割を果たしたのであろうか。この点については、是非著者に尋ねてみたいところである。

また、本文以外のことにふれておくと、巻末には索引、文献案内があり、有益である。なお、釈迦に説法のように大変恐縮ではあるが、技術的なことを指摘させていただくと、本書の注記の方式に若干の問題がある。「p.85」は「p.85」と、「p.445-446」は「pp.445-446」と表記す

べきである。

(木下賢一著『第二帝政とパリ民衆の世界——「進歩」と「伝統」のはざままで』山川出版社、2000年11月刊、300+30頁、定価2667円+税)

(さへき・てつろう 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)

復刻内容

経済復興会議
(1～3巻, 2000年6月)
産業復興会議, 地方
別復興会議
(4・5巻, 2000年8月)
業種別復興会議, 企
業別復興会議
(6・7巻, 2000年10月)
労働組合
(8・9巻, 2000年12月)
政党・経済団体
(10巻, 2001年1月)

B5判上製
各巻平均500頁
各巻25,000円

片山社会党首班内閣を経済安定本部とともに支えた経済復興会議をはじめ、各種復興会議・労働組合・経済団体・政党などの資料を集成し、経済復興運動の全容を初めて明らかにする。

編集 中北浩爾(大阪市立大学) 吉田健二(法政大学大原社研)
編集協力 法政大学大原社会問題研究所

片山・芦田内閣期 経済復興運動資料

全10巻

復刻期間

第1巻1号(大正12年8月)から第3巻8号(昭和11年8月)まで

第1回(2000年5月)
①巻②巻③巻
第2回(2000年7月)
④巻⑤巻⑥巻
第3回(2000年9月)
⑦巻⑧巻
第4回(2000年11月)
⑨巻⑩巻
第5回(2001年1月)
⑪巻⑫巻

菊判上製
各巻平均600頁
定価各巻20,000円

推薦

大内 力
大谷禎之介
社会問題、労働問題、農民問題の研究者が依
拠すべき資料
戦前の研究活動の多面的な再検討を期待する

大原社会問題研究所雑誌

全12巻

★研究所創立八十周年・法政大学合併五十周年記念出版

日本経済評論社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-2
TEL 03(3230)1661 FAX 03(3265)2993
<http://www.nikkeihyo.co.jp>

◎価格は税抜